明徳男子連年の3位

男子単 1年柳本（明徳）3位

卓球

▽男子団体準決勝（県民体育館）
野田学園（山口）3－1 明徳義塾
永峰 0（6－11、9－11、5－11）3 長谷川琳
岩井田 3（11－5、8－11、11－1、11－5）1 柳本
日野 3（11－6、11－3、8－11、12－10、8－12）0 中川 永
中野 3（11－6、11－3、8－11、12－10、8－12）0 中川 伊藤
愛工大名電 3－2 中間東（福岡）
▽同決勝
愛工大名電 3（単2－2、複1－0）2 野田学園（山口）
（愛工大名電は2年ぶり14度目の優勝）
▽同シングルス準々決勝
柳本進太郎（明徳義塾）3（11－7、11－7、11－7）1 持田（愛知・愛工大名電）
▽同準決勝
佐々木（愛知・愛工大名電）3（11－9、11－8、11－9）0 柳本進太郎（明徳義塾）
渡部（神奈川・星槎）3－2 岩井田（山口・野田学園）
▽同決勝
渡部 3－0 佐々木
▽女子団体準決勝
星槎（神奈川）3－0 益田（島根）
四天王寺 3－2 中間東（福岡）
▽同決勝
星槎 3（単2－1、複1－0）1 四天王寺
（星槎は初優勝）
▽同シングルス準決勝
竹谷（大阪・貝塚二）3－0（神奈川・星槎）小塩大野
牧野（神奈川・星槎）3－1（福岡・中間東）竹谷
▽同決勝
竹谷 3－2 牧野
＝競技終了

【男子団体準決勝】明徳―野田学園】ダブルス戦、明徳の福永＝左・中川組が攻める（写真はいずれも県民体育館＝森本敦士撮影）

心は一つプレーは多彩

団体の明徳男子は準決勝で、今春の全国選抜大会を制した野田学園（山口）に屈した。佐藤建剛監督は「あと一本がどうしても取れない」と悔しがったが、3位は堂々の好成績。地元開催の全中を大いに盛り上げた。

決勝トーナメント1回戦の浜松修学舎（静岡）、準々決勝の明豊（大分）と3－0の快勝。この日一結果」と胸を張る。そして、このチームの強みは団結力だけではない。

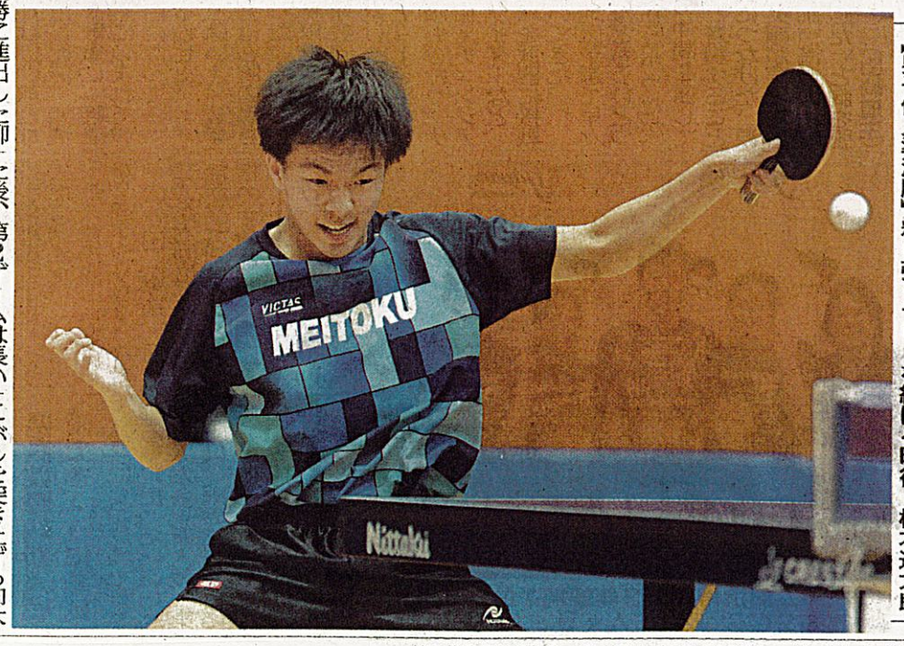
準決勝で唯一勝利した長谷川琳は、通常は守備型の選手が使うことが多いラケットでどんどん攻める変わり種だ。そして、伊藤はカットマン。中川とダブルスを組む福永に、1年生ながら個人で3位に入った柳本とサウスポーも2人いて、それぞれタイプが異なる。

多彩なプレースタイルの選手がいることで、相手が戦略を練りにくいのはもちろんだが、伊藤はもう一つのメリットを強調する。「粒高、左、カットマン。いろんなタイプといつでも練習できるから、試合でそういう相手が出てきた時に慌てなくていいんです」

今大会の登録メンバー8人のうち、3年は第3単の伊藤だけで、他の7人は1、2年生。先が楽しみなチームは、これからも心を一つに多彩なプレーを磨いていく。

（井上太郎）

サーブ武器に粘り強く 柳本



【男子個人準決勝】粘り強くラリーを続ける明徳・柳本進太郎

準々決勝に進出した柳本は第1ゲームを落とし、第2ゲームは長い打ち合いを制した。こぶしを突き上げる柳本の後ろで、得点板は「20－19」となっていた。実際のスコアは21－19なのだが、20点までしか表示できなかったのだ。

卓球用具メーカーの想定も超えて続いたこのゲームは、10－6から追いつかれてのジュース。つまり、相手の持田（愛知・愛工大名電）も相当に粘っこいのだが、柳本の粘り強さはそれ以上だった。

8強入りを決めた4回戦も、中野（山口・野田学園）に1－2から2ゲーム連取の3－2。中学1年生にこんな精神力があるとは信じられない。

本来は右利きだが、ラケットだけは左手で持つ柳本の、粘り強い試合運びの原動力はサーブ。ラケットに球が当たった直後に手首を返したり返さなかったりすると、相手には手の動きとは違う回転の球が来るように見える。そうなると相手は返すのが精いっぱい。あとは思い切ってスマッシュをたたきつければ良い。

大阪府出身。小さい頃、野球やテニスなどいろいろな競技をするうちに「一番合っていた」という卓球を選んだ。通っていた卓球教室のコーチの母校である明徳に今春やって来た。「寮のすぐ前が練習場」とうれしそうに話す。それだけ卓球が好きだからこそ、あんなに粘れるのだろう。

（井上太郎）